

きれない絆

田中六助

思い出はつきない。走馬灯のように。泉のように。池田時代からの、長い、苦しい総理への道。その苦しみの果ての大平政権の誕生。戦後の名総理と信じる大平総理とともに、「歴史の使命を果たす内閣を」と、日夜、寝食を忘れ、疲労を越えて全力投球した生きがいの日々。そして、痛恨。ベネチア・サミットを目前に、衆参両院同時選挙中の劇的壮烈な死去。戦争中、青春多感な海軍飛行将校であった私が経験した、特攻にまつわる感動と悲憤が、三十五年目に、再び、私の人生と遭遇した。

大平先生は、いつのころからか、宰相・総理字を、自身で志してこられた。私が政界で教えをこうようになつたときは、すでに、そうであった。国家と国民を結ぶ価値観創造の基本は、家庭にあると、そのころから言われていた。それが、内閣誕生では「家庭基盤の充実」となった。大平政権の柱の一つ一つは、突然の思いつきではなく、長い年月をかけて、大平さんの胸の中で、醸成され止揚されたものだった。

第一次大平内閣成立。内閣官房長官に任命された私は、官邸の総理執務室に呼ばれた。笑顔で迎えた総理は、あいさつ抜きで、執務室にある地球儀を指して、こう語りかけた。「六さん。これから、オレとお前は、この地球儀を腹の中に入れて、一体となって政治に取り組んでいこう」。以来一年半。「世界の中の日本」は、総理と私を結ぶ政治の絆となった。

昭和五十五年五月三十日。参議院選応援を終えて、最終便で自宅へ帰った私に、私邸から電話があった。衝撃

が体の中を駆け抜けた。私邸への距離が、この日は遠い。ころがるように玄関へいそぎ、六畳の間に入ると、医師団もいて、いま、入院するばかり。私が横に坐ると、総理は、私の手を握りながら小さな声で「心配するな」。

私は涙があふれてあふれて……。〔神よ、どうか総理をおたすけ下さい〕祈りながら、念じながら、手を握りかえた。これ以上の話は無理だと、医師団の注意があり、私は総理を、一生懸命、見つめる。総理は、そんな私に、右手を高くあげて、人指しゆびを一本をあげた。意味は、いまもよくわからないが、選挙に入ってから、党内の一本化ができたことがうれしかったのか、野党工作がうまくいって、話し合いの下地ができたことをあらわしたのか。総理は、病魔の中でも、政局、選挙に取り組んでおられた。

入院後。病床の総理は、新人や選挙に弱い候補者を心配されること、しきりだった。総理のご意向をうけて、私は二十九人の候補者の応援で、全国を走り回って、虎の門病院に直行、報告した。

そんなある日、総理が心配げにこう言った。「飛行機に乗ってばかりいるようだが、墜落でもしたらどうするんだ」「総理もご存じでしょう。私は海軍の飛行将校ですよ。空が一番好きで、紺碧の抜けるように青い空をみていると、苦勞を忘れますよ」。

総理が、ニッコリと笑顔でこたえた。その笑顔に魅せられて、私は、思わず、海軍時代からの愛唱歌ダンチョネ節を小声でうたった。静かな病室に、沖のかもめ……が流れた。過ぎゆくときを惜しむように総理がつづける。「君は『無法松の一生』がうまかったなあ」「やります」。小倉生まれの玄海男の一生を、私はセリフを入れて、夢中でうたった。

面会時間がきれて、別れのとぎがきた。総理は、いつものように、私の手を握り、「もう帰れ、さようなら」と言いながら、握った手は、いっこうに離そうとはしなかった。

（通商産業大臣・第一次大平内閣官房長官）